

『地域文化の再発見！カルチャーナイトで地域の絆を深めよう』

有限会社アールズセミナー代表取締役 NPO法人カルチャーナイト北海道 副理事長
佐々木 亮子 (ささき・りょうこ)

略歴：1946年生まれ。北海道大学法学部卒。1981年株式会社調査開発センター入社、1992年同社常務取締役。1995年有限会社アールズセミナー設立(教育コンサルタント)、代表取締役に就任。2002年北海道副知事就任、2003年同退任、有限会社アールズセミナーの事業再開。現在、財団法人北海道体育文化協会理事長、北海道公安委員会委員長、財団法人北海道青少年育成協会会長、NPO法人カルチャーナイト北海道 副理事長など公職多数。



カルチャーナイト誕生の経緯

1997年、私は北海道生産性本部主催の「女性によるデンマーク交流調査」に参加した。13年経った今振り返っても、自律した女性リーダーたちとの出会いと絆は得がたい財産になっている。旅の最後の10月10日(金)、コペンハーゲンで「カルチャーナイト」に遭遇したのがすべての始まりであった。夜遅くに真っ暗な街の中を大勢の人たちが歩き回っているのだ。「これ、何？」という驚きとともに、「夜のイベント」「子どもの参加」というところに強いインパクトを受け、その後ず〜っと頭の中の引き出しに納められることになった。5年後の2002年、突然私は副知事として道庁に勤務するに至り、就任してまもなく「北海道版カルチャーナイト」を検討するよう指示を出したのである。

カルチャーナイトの目的と広がり

カルチャーナイトとは、官庁がもっている公共・文化施設や民間の施設が夕方から夜にかけて同時開放し、それぞれの特色を生かした文化イベントを市民が楽しむという催しのことをいう。

今年8年目を迎える実績としては、参加施設は約100ヶ所、音楽や展示や体験教室等の文化プログラムは約160くらい、参加人数は延べ3万人というところだ。「何のためのカルチャーナイト？」と問われれば、自分の住む街のことを知り、地域に対する愛着と自信をもつためと答えたい。「誰のため？」と問われれば、主役は地域住民ということである。カルチャーナイトの街を歩くとき、われわれは北海道を懸命につくってきた人たちと一緒に時を過ごしているということだ。それも、カルチャーナイトの心である。

昨年度カルチャーナイトは、札幌市のほか鹿追町、西興部村、置戸町、夕張市、天塩町、函館市、下川町の8ヶ所で開催された。本年はさらに開催地が増えることが予想されるとともに、カルチャーナイトの先進地であるスウェーデンのノルチョーピング市から北海道と相互交流をしたいという申し出を受けている。9月25日(土)に訪問して、わがカルチャーナイトを紹介してくる予定だ。

人と地域が海外を含めて縦横につながり、カルチャーナイトのネットワークは大きなクラスターのように無限に広がることだろう。例えば、天塩町と下川町は天塩川流域として結ばれたり、留萌市と天塩町と近隣町村はオロロンカルチャーナイトに発展したり、夕張市や鹿追町や下川町は、基幹産業や産業遺産を基軸として新しい産業観光に進化したり等々、当初想定していないことが起きてくる予感がしている。



「IHでつくるグミキャンディー(ほくでん・マドレ)」



「妙夢コンサート(JR札幌駅)」

カルチャーナイトの課題

最後に、地域文化活動カルチャーナイトが持続するための課題を申し述べるならば、参加を有料化する街全体の仕組みづくりと考えている。例えば、カルチャーナイトパスを市民に購入してもらい、そのパスで地下鉄やバスが一日中乗れて、施設や飲食店では割引特典があるというような、参加する市民も応分の負担をする全体システムを構築したい。カルチャーナイトに参加するために、子どもたちが、10円、100円のお小遣いを貯める習慣をもつことが当たり前になれば、真の意味で市民が支えるカルチャーナイトといえるだろう。それが、北海道民の自律の時である。